

偽OBが、夜陰に乗じて帰来する

池内 恵

この欄に寄稿の依頼を受けたのは、たぶん私がアジ研OBだからだろう、と書いたところで早くも手が止まる。私がアジ研に所属していたのはたったの三年間。これはアジ研の相場では試用期間に辞めたに等しい短さだ。本物のアジ研OBの大先輩の方々、現役のアジ研職員から「お前は違うだろ」とブライニングを受けるのではないかと自意識過剰に尻込みしている。

三年ごときの在籍で「OBです」などと公言しにくいのは、アジ研には独特の研究者養成法があるからだ。短い在職期間中に見知った限りでは、アジ研の研究者のライフコースとして次のような認識が共有されていたと思う。まず、入所から一〇年ほどは、見習い。ただしこの見習い期間の最後に二年間、最初の現地留学がある。それまでは、現地での二年間に最大限の成果を出すべく準備を怠ってはならない。最近はずでにある程度成果を出した大学院修了者が採用され、一〇年も待たずに即戦力として働かされる、ではなくて、早期に活躍の機会が与えられるらしいが。

現地留学・調査を終えて帰ってくると、一人前として認められ仕事を任される。プロジェクトを組織し、報告書・叢書を出し、学会に論文も出すなどしてフル回転して勢いに乗るうちにまた一〇年ぐらい経つので、それまでに培ってきたネットワークを生かして二回目の二年間の現地調査に赴く。

その先の話は、もう私の想像の域外なのだが、さらに一〇年たつ頃に三度目の現地調査の機会

を得ることもあるらしく、その頃にはアジ研や研究業界の生き字引のようになっていく。

このように非常に息の長い研究が行われるアジ研では、三年間は、ほんの一瞬というぐらいの期間だ。現地留学にも行かずに辞めるとは、何のためにアジ研に就職したのか分からない、そもそも在籍していたとは認められない、とアジ研OBの秘密結社幹部会では断を下されているにちがいない（↑嘘です）。

しかしそんな私でも図書館については少し語れる。アジ研の図書館にお世話になったのは、最初は大学院生の頃だった。中東関係の研究会に入れてもらって、当時市ヶ谷にあったアジ研に通った。当時は閉庫式だった図書館で先行研究を出してもらっては読んだ。研究会で論文を書いて、アジ研の研究双書に載せてもらって、大学院を出た。ちょうど募集があったので、筆記試験と面接を受けて、運良くアジ研に就職した。

入所したのが二〇〇一年四月。海浜幕張への移転がすんで、真新しい建物に、吹き抜けの開放的な図書館ができていた。最大の変化は、開架式になったことである。欧米の植民地主義時代の回想録など、名高いが市場で買うことは不可能な古典的・歴史的な著作も、棚から直接手にとってみることができた。

ただし難点は、都心から遠くなり、都内の多くの研究者には、足を向けるのが一苦労になったこと。広さと距離の、トレード・オフの関係である。

しかしこちらはアジ研に入所したので、図書館を仕事で使えるようになった。朝から晩まで棚をみていて、お給料までもらえる。こんなすばらしいことはない。

開架なので、専門にしていたエジプトに限らず、中東の全ての国について、視野が広がった。近年の蔵書は国ごとに分類されて新しい順に配架されるので、最新の研究動向と各国の政治・社会の情勢が、本棚の前に立っているだけで浮かび上がってくる。

アジ研図書館を縦横に使えるというこの特権は、三年で外に出てしまってから部分的に維持された。OB（いちおう）の会員制度で年会費を払っていると、図書館で貸し出しもしてくれるのである。たった三年でもOBはOB！（しつこいですね）、ということと胸を張ってこの制度を使って山ほど貸し出していただきました。しかし最近OBでなくても賛助会員になって登録すると貸し出しも可能になると聞く。悪しきOB特権は剥奪されましたので、皆様こそ賛助会員となり、存分にメリットをご享受ください（<http://www.ide.go.jp/japanese/Members/ind.html>）。

開架の書棚の間を日々徘徊して身についた地域研究の学問体系への感覚は今でも残っており、大学の図書館にない専門書は、たぶんアジ研図書館のあそこにあるな、と予想して検索するとほぼ間違いなくみつかる。所属図書館の相互貸借の制度を利用して、夜中に検索してポチッと貸し出し申請をして頭のなかでアジ研図書館の本棚から本を抜き出すのである。

（いけうち さとし／東京大学先端科学技術研究センター准教授）